

「琉球史ムラ」が首里城を穢している

永津 禎三

私も共同代表を務める首里城再興研究会は、昨年の2020年11月22日、沖縄県立博物館・美術館講堂において公開討論会を開催した。

同じく共同代表の伊佐真一氏が度々発言されるように、本来は国や県が開催すべきこのような会を私たちが主催しなくてはならない大きな問題があるとはいえ、この公開討論会は、国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」の高良倉吉委員長と安里進委員も登壇し、多くの県民が参加する画期的な催しとなった。

■王国時代の写真が現れた

多くの希望者が入場出来ず、講堂の外に急遽設置されたモニターを熱い眼差しで見つめるほどの関心と呼んだのは、その1週間前、11月14日に神奈川大学の後田多敦准教授(当時)によって、ルヴェルトが撮影の最古の首里城写真が確認され、翌15日の県内二紙の新聞第一面を大きく飾っていたことがその大きな理由の一つだろう。

その15日の新聞紙上には、この写真が王国時代に撮影されたものなのか懐疑的なコメントを寄せていた高良氏と安里氏が、この討論会で後田多氏とどのような議論を交わすのか、これが注目点と観衆の誰もが思っていたはずだ。

ところが、最初の発言者になった高良氏は、那覇市歴史博物館学芸員の外間政明氏からの情報提供があり、館所蔵の「御書院日記」によりフランス人の来琉が裏付けられたと、この写真が確かに1877年に撮影されたものとあっさり認めた。

これで、王国時代末期、大龍柱が正面を向いていたことが明らかになった。まさに技術検討委員会が求めている「首里城が改変・破壊

を被らない以前、すなわち琉球王国の王城として機能していた時代の大龍柱の形態」を写真によって確定できたのである。

■絵図が間違っている？

私も含め、ほとんどの人が、これで大龍柱問題には決着がついたと思っただろう。

ところが、公開討論会の後半、技術検討委員会委員の安里氏のこの発言には耳を疑った。〈写真が「寸法記」や「尚家文書」の絵図が間違いであるという根拠にはならず、この時代にも正面だったという物証が必要だ。〉

後田多氏はこの公開討論会で、〈相対向きが維持されるには1877年までの間に正面向きに変更された事実を示す必要がある。証明できなければ、相対説は「寸法記」絵図の「読み」を誤っていることになる。〉と発言されていた。「絵図が間違っている」などとは誰も言っていない。絵図の「読み」を誤っていないかと指摘されているのだ。これを安里氏は理解できないのか。

後田多氏は、首里城正殿の復元の基準年代を、最も資料の揃っている1768年(「寸法記」絵図)から1846年(「尚家文書」絵図)の間とすることには「異議はない、しかしその前提として、今、唯一、王国時代の姿を示すのはルヴェルトが写真のみである。」として上記の発言をされていた。

つまり、二つの絵図が相対向きの根拠であるとする「読み」を維持するには、明確な証拠が存在しなければならないということだ。公開討論会では、「古老からの聞き取り」のような発言もあったが、伝聞は史料として曖昧である。

王国時代の大龍柱の向きはルヴェルトが写真によって正面向きと確定した。それでも1768年

から1846年には相対向きだったと主張するなら、「1846年から1877年までの間に大龍柱の向きを変えた事実が記述された古文書」の発見が必須という、実に明解な話なのである。

ところが、翌日の沖縄タイムスの記事では、「現状では双方とも決定的な根拠がないことも明らかになった」と報じられ、12月電子版の担当記者コラム（城間有記者）にも安里氏の発言を追認する内容が書かれてしまった。これは、新聞社の報道姿勢として大いに問題である。このような状況は、絵図の「読み」の理解不足に起因すると言ってもよい。

■絵図の「読み」とは

絵図の「読み」について十分に理解するためには、私の論考『絵図とはどんなものなのか』、または『絵図だけでは、「大龍柱は横向き」の根拠にならない』を読むか、那覇市石嶺公民館オンライン市民講座「首里城正殿大龍柱を考える」第3回：絵図とはどんなもの（YouTube 配信）を視聴していただくのが一番である。全て、「琉球大学－美術教育専修」のHP (<https://www.u-ryukyu-art.com>) でダウンロードでき、視聴もできるので、ここでは結論だけを述べたい。

18世紀の琉球で描かれた「寸法記」の絵図を、高良氏や安里氏は、近代になってからの図法である三面図の正面図と同じだと誤解している。投影法や透視図法の約束の成立していない地域や時代の絵図では、形は認識されやすい向きで描かれているだけで、「横向きの図」はその向きに立っているという根拠にはならない。

透視図法のように固定的なひとつの視点から物を捉える、こういう「近代の視覚性」は、長い人類の歴史の中では、極めて特殊な、極めて短い間のパラダイムでしかない。これは、古代エジプトのレリーフ（浮き彫り）を例にあげれば、誰が考えても明白なことで納得してもらえろと思ひ、昨年2020年10月1日付の琉球新報に

寄稿した。だが、実際はなかなか古代エジプトと「寸法記」絵図が同様なものとは納得し難いようだ。

その後、私は誰もが納得できる明解な例を探し出すことが出来た。それが「多賀参詣曼荼羅」である。これについては、上記の論考でも述べ、今年2021年9月15、16日付の沖縄タイムスにも寄稿している。両新聞記事ともやはり「琉球大学－美術教育専修」のHPで閲覧が可能で図版も確認出来るのでこちらも是非読んでいただきたい。

この「多賀参詣曼荼羅」（多賀大社蔵）は、安土桃山時代の絵図である。その明解な例は、社頭で行われている射礼（弓を射る）行事の場面である。「弓を射ている人」の前方、台形の形の中に同心円が描かれているもの、これは「的（まと）」なのだ。的なので、本来なら「弓を射ている人」の方向、つまり横向きでなければならない。しかし、横向きではなく「こちら向き＝正面」を向いている。的は平面的なものなので正面向きに描かなければ的と分からない。まさに、認識しやすい向きに、本来は横を向いている筈のものを正面向きに描いているのである。

「寸法記」絵図の大龍柱も横向きに描かれているからといって、それが横向きに立っていたと断定する根拠にはならない。絵図だけでは向きを特定することが出来ないことをこの「多賀参詣曼荼羅」の「的」は明解に示しているのである。

黒田日出男氏は東京大学名誉教授で、1970年代から、それまで文献史料によってのみ研究されてきた歴史学の世界に、絵巻物や絵図のような絵画史料を持ちこんだ先駆者である。

その著書『[増補] 絵画史料で歴史を読む』には、次のような重要な文章がある。

〈絵画作品というのは、一定の約束事（コード）によって描かれていることに、十分な理解と配慮が必要だと言いたいです。つまり、「絵画史料」の読解にあたっては、そこに表現されて

いるモノやコトが、どのような約束事による記号表現であるのか、ないしはイディオム(慣用表現)であるのかを把握しなければなりません。そこから出発して「絵画史料」を読んでいくことになります。)

安里氏の発言は、絵図の「読み」において、この「歴史学の基本認識」の欠如を露呈している。技術検討委員会は、二つの絵図を「歴史学の基本認識」を欠如したまま相対向きの根拠だと言いきり、強引に進めようとしているのである。

■「寸法記」解説文が差し替えられた

昨年2020年10月1日付琉球新報の記事を書いた時点では、私はまだ、「寸法記」絵図を直に見たことはなく、印刷物を見て論じていた。

その2020年、10月23日から11月3日の会期中、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館において、企画展「琉球の芸術・文化に魅せられてー鎌倉芳太郎と首里城ー」が開催された。

尚家文書の絵図である「百浦添御普請絵図帳」(複写物)と「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」(略して「寸法記」)が全て、上段と下段に対応して並べられた素晴らしい展示であったが、この展示のキャプションが、展示期間の最終日に突然、差し替えられてしまうという事態が起こった。

キャプションは、二つに分かれていてひとつはこのようなものであった。

乾隆三拾三戌子
百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記
鎌倉芳太郎資料
原図 :1768年
筆写 :1920年代
沖縄県立芸術大学附属図書館・資料館所蔵

そして、もうひとつのキャプションが、差し替えられたものである。

11月2日まではこちらが展示されていた。

上段が「百浦添御普請絵図帳」、下段が「乾隆三拾三戌子百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」である。前回の首里城復元の際には、下部絵図(鎌倉芳太郎資料)が参考にされたが、のちに上部絵図(尚家関係資料)がひろく知られるようになった。描かれた絵図、書かれた文字などがほぼ一致するため、上段の図を筆写したものが下段の絵図であると思われる。しかし、上段絵図が道光26(1846)年の重修の際に作成されたと説明されるのに対し、下部絵図は表題に乾隆33(1768)年とあり、双方の年代が一致しない。下部絵図の表紙とされる紙が別の史料から紛れた可能性もあるだろう。また、双方ともに上段絵図には、原本のため方形と円形の押印がみられる。そのうち方形の印は「法司之印」(三司官の印)である。

11月3日に差し替えられた後のキャプションは、これである。

上段が「百浦添御普請絵図帳」(尚家関係史料)、下段が「乾隆三拾三年戌子百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」(鎌倉芳太郎資料)である。前回の首里城再建プロジェクトでは主に下部絵図(鎌倉芳太郎資料)が参考にされた。上段絵図は道光26(1846)年の重修の際に作成されたと説明され、下部絵図は表題に乾隆33(1768)年とある。下図は複写されたものと思われるが、だれの手による複写などかは不明である。なお、上段絵図には、原本のため方形と円形の押印がみられる。そのうち方形の印は「法司之印」(三司官の印)である。

差し替えられる前の解説の内容は、私にとって実に興味深いものであったため、11月2日に展示を鑑賞した際に、この解説文を書き写した。書き写しであるから、正確を期するため、この

解説文のデータを頂けないかを、会場にいらっ
しゃった学芸員にお願いした。

翌日、学芸員から、次のようなメールが届いた。

ご依頼のありました当館企画展「鎌倉芳太
郎と首里城」の解説文につきまして一部修
正の必要もあり、原案を考えていただきま
した麻生先生と森館長に現時点での見解を
相談しているところです。
そのため、学術的に引用するのはご遠慮い
ただければと存じます。
本日変更したものを送付いたします。
ご理解いただければと存じます。
よろしくお願い申し上げます。

驚いたが、諸々の事情もあるのだろうと、次
のように返信した。

永津です。ご連絡ありがとうございます。
修正及び引用の件、了解いたしました。
ただ、現段階での解説では、意味不明になっ
てしまいますね。
研究の進展と研究成果の自由な発表をお祈
りします。

二つの解説文を比較すれば明らかだが、差
し替え後の解説は、解説者の考察が消えた、
殆ど無内容なものになってしまっている。

私がメールで「意味不明」と書いたのは、
この「寸法記」を筆写したのが、鎌倉芳太郎
と考えられることまでもが「だれの手による複
写などかは不明」とされているのかかわらず、
「筆写：1920年代」と記載されている1つ目の
キャプションはそのままであるため意味不明とい
うことを示したつもりであった。よほど慌てて差
し替えたのであろうことが推察できる。

会期初日の翌々日の琉球新報電子版2020年
10月25日には、企画展の紹介記事として〈鎌倉
氏が書き写した「寸法記」（1768年に首里城正
殿を修理した記録）も公開している〉と報道され
ていた。展示がこのスタンスで行われていたの

は間違いなし、最終日を含め殆どの観客がこ
の「寸法記」は鎌倉芳太郎が筆写したものと思
いながら鑑賞していた筈である。

■「寸法記」は何を写したのか

差し替え前の解説文で私が注目したのは、
「描かれた絵図、書かれた文字などがほぼ一
致するため、上段の図を筆写したものが下段
の絵図であると思われる。しかし、上段絵図が
道光26（1846）年の重修の際に作成されたと
説明されるのに対し、下部絵図は表題に乾隆33
（1768）年とあり、双方の年代が一致しない。
下部絵図の表紙とされる紙が別の史料から紛れ
た可能性もあるだろう。」の記述である。私も同
様、可能性の一つとして考えていた。

この部分も、差し替え後は消えてしまっている
が、もしも、この推論が正しいとすれば、筆写
されている図が1768年の「百浦添御殿普請付
御絵図并御材木寸法記」の図と同様であるとい
う根拠は失われてしまう。ある意味、かなり大
胆な推論であるが、可能性としては確かにある。

私としては、もともと、尚家には1768年の「百
浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」と
1846年の「百浦添御普請絵図帳」の二つの
文書があったと考えている。そして、現存する
1846年の「百浦添御普請絵図帳」は1768年の
「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」
の図を写して作られたものであり、鎌倉芳太郎
も、1920年代には存在していた、1768年の「百
浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」を筆
写した。つまり現存する二つともが、今は失わ
れてしまった1768年の「百浦添御殿普請付御絵
図并御材木寸法記」の図を写したものと解釈す
る事が可能ではないかと考えている。

このように、若干異なるものの、「描かれた
絵図、書かれた文字などがほぼ一致するため、
上段の図を筆写したものが下段の絵図であると

思われる。」という部分は、「上段の図」の部分を〈当時は存在していた1768年の「寸法記」原本の図〉と置き換えれば、見解は一致する。その都度、一から描かれた二つの図がこのように一致する筈はないからである。

高良倉吉氏は2020年10月14日琉球新報に掲載された談話の中で次のように語っている。〈「寸法記」で大龍柱は向き合っている。約80年後に書かれた尚家の文書でも大龍柱は向きあわせだ。まったく同じだがそのまま引用した訳ではない。1846年段階では首里城は燃えていなく、現物があったのでそれを見ながら描いた。「寸法記」の際も同じものを見て描いているから全く一緒だ。〉

また、高良氏から資料提供を受け執筆されたと思われる、与那原恵『首里城への坂道 鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』には次のような記述があり、これが高良氏の『寸法記』への見解なのだろう。(アンダーラインは永津による)〈さいわいにも、開学まもない県立芸大に〈鎌倉資料〉が寄贈されたばかりであり、そのなかから風呂敷に包まれた『寸法記』が発見されたのである。... (略) ... それは1768年10月に作成された文書で、「御絵図」は原本、もしくは原本にちかいかたちで写された図であり、「御材木寸法記」のほうは鎌倉が昭和2年に中城御殿で、フィールドノートとはべつのノートに書き写していたのだった。〉

琉球新報の談話で、高良氏は、「寸法記」も尚家文書も、そこにある首里城正殿をその都度、見て描いたと語っているが、このように、建物の形態のデフォルメや大龍柱と建物の比率までぴったり一致する図は、「写し」としか考えられない。

そもそも、常に新しく描かれなければならないという発想自体が近代的価値観である。当時の価値観では、「過去の良いものは、写す」と

いうことが当たり前に行われていた筈だったのである。

■学問の自死

差し替え前のキャプションの解説文の内容は、高良氏のこの見解と真っ向から対立する。もともと高良氏の解釈に批判的な立場だった私が、解説文のデータを希望したために、これに気付いた「麻生先生と森館長」が高良氏に忖度し、そのデータを提供することを拒んだと考えるのが一番自然ではないだろうか。

いずれにせよ、突然、キャプションが差し替えられてしまったのは、大きな問題である。

私の推論も含め、様々な見解をぶつけ合い、自由に検討することが、学問の発展には欠かせないことだからである。このキャプション差し替えは、その機会と自らの自由な研究成果の公表を放棄してしまった。

このような忖度があったとすれば、これこそまさに「学問の自死」と言わなければならない。

私は、この解説文差し替えの経緯をうやむやにし、その内容の学術的引用を遠慮し続けるということは、学問の発展のために決して良いことではないと確信するに至り、2021年7月1日付で沖縄県立芸術大学波多野泉学長ならびに森達也附属図書・芸術資料館長宛に文書〈企画展「鎌倉芳太郎と首里城」における解説文差し替えとその内容の取り扱いについて〉を提出し、大学でよく確認し、報告いただくよう要望し、その後も幾度も回答を求めている。しかし、いまだに大学からは何の返答もない。(2021年10月31日02:35現在)

現存する「寸法記」絵図と言われるものが「写本」でしかない以上、これが確かに1768年の「寸法記」絵図原本の「写本」であるという確証は残念ながら無い、1768年に正殿や大龍柱がどのような形態だったかの確たる根拠は無いというのが歴史資料としての事実なのである。これ

を隠蔽し、二つの絵図を「歴史学の基本認識」を欠如したまま相対向きの根拠だと言い張り、首里城正殿の復元の基準年代を、「最も資料の揃っている1768年から1846年の間」とすることは何なのか。

■「琉球史ムラ」が首里城を穢している

ここで思い出されるのが、冒頭の、「御書院日記」である。ルヴェルトが撮影の最古の首里城写真が確認された僅か1週間後に、この「御書院日記」が現れた。もともと分かっていたものをそれまで、「忖度」して「隠蔽」していたのではないのかという、拭い去れない疑念が湧き上がってしまうのだ。

安里進氏は、ルヴェルトが撮影の写真が報告された直後の2020年11月15日、自身のFacebookにこのように書き込んでいる。

〈…以前からネットで多くの写真入りで紹介されている。フランス・琉球関係研究者なら、この写真の存在を知っていると思う。…〉

〈…後多田氏のレジュメでも報告を聞いても、これらの写真・版画を琉球処分後の写真ではないかという疑問は払拭できない。いずれにしても、歴史研究者が、大龍柱の「正面説」を提起したことで、歴史研究という同じ研究方法の土俵で、議論できるようになったのは大きな前進だと思う…〉

以前からその存在を知っていたのなら、なぜ、その資料を誠実に調べようとしなかったのか、呆れ返るばかりだが、その翌日には、前日の書き込みについて情報不足から後多田氏に対して誤った批判をしたことへのお詫びを書きつつ、最後にこのように書き込んでいる。

〈私は、写真の年代について明治10年（王国末期）に疑問を持っていますが、この疑問を払拭する確かな証拠も、逆に、琉球処分以降だという明確な証拠もまだつかめていません。このような疑問の残る写真を根拠に、王府文書を頭から否定する勇気は、私にはありません。〉

「王府文書」とは、技術検討委員会によって幾重にも曲解された「寸法記」のことであろう。

これに対して、次のような書き込みがあり、私は驚愕した。

〈進さん… 歴史学者としてのストイックな姿勢に感銘しています。私たちが琉球大学の史学科のころ、確か京都大学教授だった宮崎市定氏の本で読んだと記憶していますが、歴史家は歴史を創りたいという欲求と常に闘わなければならない、という言葉であらためて噛み締めています。…〉

歴史を語れるのは歴史学者だけだという傲慢と怠慢、そして、「忖度」と「隠蔽」さらに「利権」。まさにこの「ムラ」体質は、新型コロナウイルス感染症対策「分科会」の「感染症ムラ」、そしてよく語られる「原子力ムラ」と同様の体質、まさに「琉球史ムラ」と呼ぶべきものである。

「琉球史ムラ」が首里城を穢している。



「大龍柱を考える会 公開講演会」で話す筆者（2020年10月31日）